

濱田庄司の作風変遷と朝鮮陶磁——糖黍文を中心に——

裴洙淨（日本学術振興会／関西大学大学院）

本発表は、濱田庄司(1894－1978)の糖黍文の変遷について、朝鮮陶磁の影響を中心に検討することで、濱田の作風について再考することを目的とする。

先行研究では、濱田が陶芸活動を行った英国、沖縄、益子については多く論及される一方、濱田が度々訪れた朝鮮への言及は少ない。糖黍文に関しても、濱田が沖縄で糖黍畑を見て描き始めたことから、沖縄との関係が専ら言及されている。一方、鈴木禎宏氏は、「絵唐津の鉄釉による絵付は濱田の糖黍文の描き方に活かされている」と述べ、絵唐津からの影響を指摘している。

糖黍文は、濱田作品のトレードマークとされ、1920年代から生涯にわたって最も多く見出されるものである。これまで濱田の糖黍文は、比較的写実に近かった初期の表現が、時代を経るにつれ、簡略化され、絵画よりも書に近づいたという指摘がなされている。また、柳宗悦(1889－1961)は「活きつつある生命の紋」と高く評価した。さらに濱田は、糖黍文には作風の多様性がみられると述べている。このように様々な言及がなされてきたにも関わらず、糖黍文の表現をめぐる変遷について詳しい検討は未だ行われていない。

濱田の朝鮮への関心は、1918年に始めて渡朝して以降、英国滞在期(1920－1923)にも続いており、当時『白樺』(李朝陶磁器特集号、1922年9月号)を読むことによって、濱田は朝鮮陶磁に触れていた。その関心は、濱田の《絵刷毛目花瓶》(1923)にも表現されている。ただ、本発表では、糖黍文を通し、濱田の作風と朝鮮陶磁の関係を考察する上で、作風の転換期とされる1930年代後半から40年代前半に注目したい。この時期は、濱田が益子を拠点にし、活発に作品活動を行うと同時に、民藝運動が本格的に始まった時期であるが、とくに濱田が二度目の渡朝をした1936年と1937年を強調したい。なぜなら、朝鮮へ渡って表現の幅を広げた濱田は、糖黍文の表現を簡略化しつつ、力強い筆使いを用いるようになったからである。

また本発表では、糖黍文を中心とする濱田作品と、現在益子参考館に所蔵されている濱田が蒐集した朝鮮陶磁、及び日本民藝館所蔵の柳による朝鮮陶磁蒐集作品を比較検討する。それにより、糖黍文の表現には朝鮮陶磁の影響があることを明らかにしたい。たとえば、柳の蒐集品《鉄砂草文瓶》の単純化された草文は、濱田の1939年作《鉄絵水差》の表現と近い。また、同年作《灰釉鉄絵長方角鉢》に見られる糖黍文も同種の描法を用いている。また、濱田による朝鮮蒐集品の絵付の大半は草花文と竹文であるが、とくに《鉄砂笹文瓶》にみられる文様感覚は、晩年の濱田《塩釉鉄砂抜絵方壺》(1973)の糖黍文と共通している。結論として、濱田の糖黍文の源泉が沖縄にあるにせよ、糖黍文の変遷と晩年の非具象的な表現は、朝鮮陶磁の草花文の影響によるものであったと指摘しておきたい。